

ゼロから始めるヒロインRP

カチュア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

美少女にTSして異世界転生したと思ったら、なんかもう一人異世界召喚されたっぽい人がいた。その人についていつてヒロインムーブしようと思います。

目次

プロローグ	1
一話	5
二話	10
三話	13
四話	18
五話	23

プロローグ

——ガラス窓に映る自分の姿を、まじまじと眺めている少女がいた。

腰まで伸びたストレートの金髪に、それと同じ色をした瞳。顔立ちも美しく整っているが、感情の読み取りづらい無表情。140センチほどの身長を、少しサイズの大きいローブでその身を包んでいて――

要するに金髪金眼萌え袖美少女。それが、今の俺の姿だ。

……そう、俺です。TSして異世界転生しました。

「女の子になってみたい！」と「異世界転生してみたい！」は誰もが一度は考えるであろう妄想の話だが、まさか現実になる日が来ようとは……。それも両方いつぺんに。

人生何が起こるか分からないとはよく言ったモノだよな、うん。

かくして、二度目の人生を金髪金眼美少女として送ることになった俺だが、一つ疑問がある。

転生したこの世界、建物や道路などはまさしく中世風といった様相を呈している。車はトカゲ風の生き物が引いていたり通りを歩く人々に亜人が混じっていたりする、異世界的要素の違いはあれども、文明レベルは元居た世界のそれとそう大差ないだろう。

——ならばどうして、あの少年はジャージ姿でビニール袋を提げているのだろうか。

背丈からして高校生くらい。短めの黒髪。三白眼の鋭い目付き。特徴らしき特徴はそんなもんで、元の世界であれば気にも留めないような存在。まるでコンビニ帰りそのままのようなその姿は、ことこの場所では強烈な違和感を発している。

まさかそんなことないと思いたいけど、彼ももしかして……。あ、今「異世界召喚ってヤツううう!」って叫んだ。うーん、なるほどね。

『異世界召喚主人公のヒロインポジ美少女ロールプレイ』って、聞いたことあります……………?」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

とりあえず、しばらくその少年を観察することにした。

今は、八百屋のおじさんに指差して果物の名前を聞いている様子。言葉は通じてるけど、文字が読めてない感じかな。その後、手にした硬貨を見せ、追い払われてしまった。

俺は少年が去った後の八百屋を覗いてみる。『リング』に『レモム』に『ピーマル』……普通に読める。あれ、彼は読めてない風だったんだけどな、違ったか？おそらく同じタイミングでこの世界に呼ばれているから、俺と彼に違いがあるとは考えにくいが……

なんてぼうっと眺めていたら、八百屋のおっちゃん目が合った。

「おう、嬢ちゃん。何にするかい？」

「あ、えーと……じゃあこのリングを二つほど」

「あいよーまったく、客つてのはこういうのをいうんだよな……」

ボソツと悪態をついたのはさっきの少年のことだろう。ちよつと聞いてみようか。

「さっきここにいた彼、何も買わずに追い払ってましたよね。何かあったんです？」

「あー、見てたのか。なに、売りモンの名前聞くだけ聞いて、結局無一文だったってだけだ。商売の邪魔するならとつと帰れつてな」

「なるほど、迷惑な奴もいたもんですね。これで足りみますか？」

「おうよ、ぴったりだ。毎度ありー」

ローブのポケットに入っていた銅貨をいくつか渡し、リングを受け取る。無意識でやってたけど、通貨の価値もリングの値段もなぜか分かっていた。

ふーむ、やっぱり彼は文字が読めていなかったっぽい。対して俺は、この世界の知識がある。というよりも、体が覚えている感じだろうか。

その辺りは要検証案件だとして、今は彼を見つけないと。

そう離されてはないだろうとぐるっと辺りを見回して……裏路地に入っていくジャージ姿の背中を見つけた。

なんともストーリーキングしづらい所へ入っていったな。どうするか……なんて考えていたら、彼の後をつけるようにしていかにもなチンピラ風の三人組が路地へ入っていった。

んー、主人公ピンチの予感？

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

——これは、終わった。

少年——ナツキ・スバルの胸中は、諦めに支配されていた。

ついさつき、コンビ二帰りに突如として異世界召喚されたばかりだった。最初は困惑したが、これから輝かしい異世界生活が始まるのだと思うと、期待に胸が躍った。

与えられたチート能力で無双し、自分を召喚したヒロインに惚れられ、世界を救う英雄になっつちやつたりして……なんて

ナツキ・スバルの主人公物語がこれから始まるのだと、そう思っていた。

しかし、現実とは違った。

チート能力はおろか魔法すら使える気配もなく、召喚した美少女に出会うどころか話をした相手は八百屋の店主だけ。しまいにはチンピラ相手にすら歯が立たず、こうして命を脅かされる始末。

——何のための異世界召喚なんだよ。俺が、何をしたいんだ。

恨み節すら声に出ず、袋叩きにされる痛みが終わる気配はない。何もできず、ただ終わりを待つのみ。自分の無力感に、空虚な終わり方に、涙がこぼれそうになった。

「——そこまでよ」

聞こえた声は、二つ重なって。

表通りの雑踏も、男たちの喧しい罵声も、絶え絶えなスバルの荒い呼吸も。
すべてを置き去って、美しく響いた。

一話

どうやら予感は当たってしまったようで、少年は路地裏の先でチンピラ三人組に袋叩きにされていた。

蹲った背中を殴られ覆った腕ごと顔を蹴られ、絶体絶命のピンチといった様子。

……異世界人、割と容赦ないな。一人は刃物も持ってるし、流石に助けないとヤバいかも。死んじやいそう。

ここで助けに入るのヒロインっぽいし、なんて考えてない。別に考えてないけど、——せっかくの登場シーンなんだし、素敵に決めなきゃね。

イメージはクール系なヒロインで、いざ。

「——そこまでよ」

意気込んで発した声は、思いつきり別の声と被った。

……誰だ、この大事な場面の邪魔をしたのは。

恨めしげに声を被せた下手人を見やると、同じタイミングでこちらを見た紫紺の瞳と目が合った。

俺より頭一つ分ほど背の高い、長い銀髪の美少女。

その髪は腰まで届き、肌は透き通るように白く。纏う衣服も白を基調としていて、派手すぎる装飾はないが荘厳さを醸し出している。迷いなく見据える瞳と凜とした立ち姿は、薄暗い路地でも損なわれることない存在感を放っていた。

視線が交わったのは一瞬。少女はすぐにチンピラへ向き直り、動揺する彼らへ剣呑な敵意を飛ばす。

「それ以上の狼藉は見過ごせないわ。そこまでよ」

「そうね、今なら見逃してあげるから、その男からから離れて——」
「今なら許してあげる。だから、潔く盗んだ物を返して」

まあ味方がいるなら心強い、と一緒に攻めようとしたら……この子今なんて？

「盗んだ物？」

「お願い、あれは大切な物なの。他の物なら諦めもつくけど、アレだけは絶対に駄目。いい子だから大人しく渡して」

早口で捲し立てるように懇願する少女。しかし、対するチンピラ達の顔には戸惑いの色が浮かぶ。恐らく彼らも、俺と同じく彼女の言葉に同じ違和感を覚えたのだろう。

「おい、こいつを助けに来た訳じゃねえのか？」

「……変な格好した人ね。私に関係あるかって聞かれたら、無関係って答えるしか無いわ」

代表して投げた大柄の男の疑問に、遠回しに助けに来たわけではない、と答える少女。

その答に全員の困惑が強まり、場の空気がなんとも言い難いモノになっていく。

ええ、これどういう状況？

「じゃあ、そつちのお前は？」

「……なんか、この流れでその男を助けに来たって言いづらいから、私も彼女と同じってことにしといて」

雰囲気を負けた。こんな空気じゃ「助けに来たわ！」なんてヒロイン風吹かせられない。これ以上状況を悪化させてたまるか。

俺の言葉でチンピラ達は思いつきり眉を顰めてより困惑した表情をし、地面に倒れ伏せる少年は絶望したような視線を向けてきた。

ごめん許して。困ってるのはこっちも一緒なんだから……

「こいつが関係ないって言うなら、俺たちは別口だ！なんか盗まれたんなら、さっきのガキだろ！」

「そうだ！あつちに逃げてった！壁蹴って、屋根伝っていったぞ！」

チンピラ達の続けざまの弁明に、今度は少女の方が困ったような表情を浮かべる。

どうやら少女は何か勘違いしているっぽい？おかけで俺の適当な言い分は聞き流してくれたようで何よりではあるが。

「あら、人違いですってよ。どうする？お姉様」

「私、あなたのお姉ちゃんになった覚えは無いのだけれど……でもそ

うね、嘘は言っていないみたい。なら、先を急がないと」
おっと、つい口が滑った。

ほら、金髪と銀髪の対比だし、身長差ももい感じだし、何よりお互い美少女じゃん？

姉妹ってことにすればごまかせるんじゃないかって、ね？

そんなことを考えているうちに、少女は立ち尽くす男たちの横を抜け、路地の奥へと走って行く。

人情とかその辺、割とドライな世界なんだな……おや？

「——それはそれとして、見過ごせる状況じゃないの」

言うが早いのか、振り返った少女は掌をチンピラ達に向け、——虚空から生まれた氷塊が、彼ら目掛けて放たれた。

棒立ちしていた男達は突然の事に反応できず、苦悶の声を上げて次々に吹っ飛ばされる。

魔法。

異世界ファンタジーならお約束のそれ。実際に目にするのは初めてであるはずだが驚きや感動はない。ここじゃ当たり前だと体が知っているようだった。

っていうかちよつとき、

「助けるなら助けると、最初からそう言ってよね」

余計な気を遣わずに済んだのに——と。

起き上がろうとチンピラの無防備な背中に、右手を銃のように構え狙いを定める。イメージするのは氷。たった今日の前で放つてくれたおかけで形を浮かべやすい。

体内を流れる何かを感じる。これがマナってやつかな。これを指先に集めるようにイメージして……お、出来た。あとはこれを飛ばすっ。

「ばん」

指先に浮かんだ氷礫を、適当な掛け声とともに射出する。思い描いた通りに氷礫は飛来し、命中。チビの男一人を吹き飛ばして昏倒させることに成功した。

よし、残り二人。

「やってくれやがったな、クソアマ！」

「調子乗んじやねえぞ、クソガキが！」

口汚く罵声を飛ばしながら立ち上がってくるチンピラ達。怒りのままに今すぐにも飛び掛かってきそうな勢いだ。

「威勢がいいのは結構。だけどケンカを売る相手は間違えないことね」

「今引き下がるなら追わないわ。こっちも急いでるの」

威嚇の意味を込めて魔法を発現させる。今度は先の尖らせた氷柱だ、当たったら痛いぜ。

その光景に一瞬で顔を青褪めさせたチンピラは、昏倒した仲間を拾い上げて走り去っていく。舌打ちに、「次に会ったら覚えておけよ」なんてらしい捨て台詞も残して。

「ふう、良かった。あ、あなたは大丈夫？ケガとかしてない？」

「ええ、おかげさまで。それよりも……」

へたり込んでいるジャージの少年を見やる。

顔は痣だらけで、服も煤けてボロボロ。ところどころ切れて血もでていて、満身創痕といった有様だ。

視線が向いたことに気づいた彼は、壁に手をついてゆっくりと立ち上がる。

めっちゃフラフラしてる。無理しない方がいいんじゃないか……

「ありがとう、助かった……。なんか急いでるんだろ？俺のことは気にせず行ってくれ。俺ってば体が丈夫なのだけが取り柄——あれ」

あーあ言わんこっちゃやない。思いつきり顔から倒れた。痛そう。

その衝撃で気絶してしまったようで、再び起き上がってくる気配は無い。

このまま放っておくわけにはいかなからなあ……。しようがないから面倒見てあげよう。寝起きに「起きた？」って声かけるのはヒロインのお役目だ。

「この人は私が何とかしますので、用があるようなら行ってください」「……いえ、私が治療するわ。この子に聞かなきゃいけないことがあるもの」

「何か物を盗られたような口ぶりでしたが、急がなくていいんです？ さっきの男達の言い分を信じるなら、下手人はとつくに逃げてしまってますよ」

「だからよ。あの人たちが見てたなら、この子も何か知ってるはず。助けたことの対価に、その情報を教えて貰わなくちゃ」

強情だな、この子。

倒れた少年に近づき体勢を楽にさせてあげる少女。その手から青白い光が溢れ、見る見るうちに少年の顔の痣や腫れが収まっていく。

この少女、対価だのなんだの言って、さも自分本位に行動してるように振舞っているが、根っこはいい人なんだろうな。見知らぬ人に気を遣ったり、手を差し伸べることができる時点でそれは明らかだ。

見た目も良ければ性格も綺麗ときた。こんな子に助けられたら惚れちゃうよ全く。

ちなみに俺はちゃんと自分本位で動いたからね。見た目は負けじと美少女だけど残念ながら中身が付随してない。

……こんなんでヒロインロールとかやってられるのか、俺。

二話

頬のあたりに軽い刺激を感じ、水面から顔を出すように眠りから目覚める。

一度目が覚めたらすぐに意識が覚醒するのがスバルの体質で、例に漏れずすぐに意識ははつきりする。

そうして開いた目に最初に飛び込んできたのは、眩い金と輝かしい銀。それはあの時、薄暗い路地に響いた声の、先に立っていた光と同じ色。絶望に飲み込まれそうになっていたスバルを救い上げてくれた希望の輝きで――

「あ、目が覚めた？」

「寝起きに美少女から声を掛けてもらえるなんて、この世界はハーレムものだった……？」

「起きてないみたいね。えい」

「ぶりていっしゅ?!」

頬に突き刺さるような痛み、いや実際に指をぶつ刺され、スバルは大きく仰け反る。

「起きてる、起きてるから！バツチリ目合ったよね今！」

「いきなり意味の分からない事を言い出したので、つい」

スバルのすぐ隣にしゃがみ込み、覗き込むように見ていた金髪の少女。幼さの残る顔立ちだが、髪と同じ色をした瞳は底の見えない光を孕んでいる。位置的に、頬に指を刺してきたのは彼女だ。

彼女は間違ったことはしていないとばかりに表情を変えず言い放ち、立ち上がってスバルの傍を離れる。それにつられるようにしてスバルも体を起こす。

「行動に移すまでが早いよ……こっちはついさつき散々顔を蹴られまくってトラウマに……あれ、そういえば」

引き合いに出したことで、自分の体の異変に気付いた。

眠りに落ちる前の出来事、チンピラ達に袋叩きにされ、死すらも覚悟した痛みがすっかり消えている。体や腕、足を確認してみても、痣や傷跡らしきものも残っていない。

スバルの体が不死身のように魔改造されている線を切って捨てるのであれば、結論は出る。

「もしかして、治癒魔法とか使ってくれた感じ？」

「傷を治したのは私よ。それだけ元気ならもう大丈夫そうね」

そう言ったのは、逆サイドで仁王立ちしていた銀髪の少女の方。

こちらを気遣うような銀鈴の声音は優しく、しかしその紫紺の瞳はスバルの一挙手一投足を注視し、警戒しているのが分かる。

ともあれ、自分を助けてくれた相手である事は間違いないため、礼を言おうと少女に向き直る。

「ありがとう。傷を治してくれた上に、起きるまで付き合わせちゃって……」

「勘違いしないで。あなたに聞きたいことがあるから残っただけに過ぎないわ。——あなた、私の盗まれた徽章に心当たりがあるわね？」

そう言ってぐい、と詰め寄ってくる銀髪少女。嘘は言わせないとばかりにまっすぐ見つめてくる美しい顔に、スバルはつい赤くなって視線を逸らしてしまう。

「そうやってそっぽ向くのは、やましいことがある証拠。ちゃんとこっちを見て、知ってることを教えるの」

「いや、たぶん思ってるのと違う反応よそれ。せめてもうちよつと離れてあげて」

男心に敏感な子がいてくれて助かった。もう少しで目が潰れるところだった——と、無駄な思考で落ち着きを取り戻す。

「申し訳ないんだけど、その徽章？に心当たりは無いかなあなんて」「そう、なら仕方ないわ。あなたは何も知らないっていう情報をくれたから、治療したことの対価は受け取ったわ。次同じ場面に遭遇しても助けに入るとは限らないから、せいぜい気を付けることね」

さも正論のように早口で言いまくし立てる少女。彼女の望んだ答えなど、何一つなかったというのに。

あっけにとられたスバルが何も言えずにいると、見切りをつけたのか視線をもう一人の少女へ向ける。

「それとあなたも。女の子が一人で危ないことしようとしちゃダメ

よ」

「それはお互い様じゃなくて?」

「私はちゃんと奥の手があったから大丈夫なの。ともかく、自分の身を大切にすること。いいわね?」

「あなたに言われるの、釈然としないわ……」

不満げに眉を顰める金髪の少女をよそに、身を翻し表通りへ去って行く銀髪の少女。

残された少女とスバルは目を合わせる。

「はあ、なんかすごい人ね、あの子」

「……そう、だな」

急いでるはずなのに助けを求める人を放って置けなくて、知らない人を付きつきりで看病して、見返りを求めるどころか負い目を感じさせないためにへたくそに言い訳して。まるでお人好しが服を着て歩いているような、そんな人。邪魔でしかなかったスバルを責めることだって出来た筈なのに、そんな素振りは一切見せず。

彼女は、すべて自分の為の行動であると、本心で思っていることが分かってしまって。

「そんな生き方、絶対損するばっかじゃねえか——!」

「あ、ちよつと!?!」

スバルは自然と駆け出していた。素直じゃなくて世話焼きで、底抜けにお人好しな銀髪の後ろ姿を追って。

三話

どうして俺が見ず知らずのジャージ姿の少年についていくのか、理由は一つ。

訳も分からず異世界転生した中で、彼が唯一の取っ掛かりだからだ。

今でこそ落ち着きを取り戻しているが、右も左も分からない別世界に、目的も使命も無いままに放り出されて。

それに加えて体は弱い女の子。文字や言葉は理解できたが、それだけじゃ釣り合いが取れない程状況は酷く。

これで冷静でいられる方が異常ってもんだろう。

そんな中、目に入ってきたジャージ姿。世界観にそぐわないその『特別感』は、何かあると思わせるには十分で。

要するに、希望に縋りつきたかったってだけの話だ。深い理由は無い。

今まさに、助けてくれた銀髪の少女を追って飛び出した彼の少年と似たような思いではなからうか。

だったらその気持ちは分かるけど、落ち着いてくれ。

「動くなって忠告されたばかりでしょ。また倒れても知らないわよ」「うぐ、悪い。でも無理してでも動かなきゃいけねって思っちゃまったんだ」

ふーん、ちよつとかっこいいこと言うじゃん。なら、成り行きを見守らせて貰おうかな。

「あなた達、何？話は終わった筈よ。これ以上は私もちよつとしか付き合ってもらえないんだから」

少年が呼び止めた銀髪の少女は、胡乱げな目をしてこちらを見ていた。

それでもちよつとは付き合ってくれる辺り、やっぱり人の良さが隠しきれていない。

「大事なものを探してるんだろ？俺にも手伝わせてくれ」

「でもあなた、何も知らないって……」

「確かに、盗んだ相手の素性も名前もどこ中かもわからねえ。けど、顔とか特徴は覚えてる。何も知らないって情報よりも有益だと思うけど、いかが？」

「そんなことされても私、何のお礼も出来ないわ。治療した分の対価はさつき貰ったし……」

「それはそうだけどそうじゃ無いって言うか……とにかく、お礼なんかいらぬ。これは勝手に納得いってない俺の我儘だから。例えるならそう、路地裏で倒れてる見ず知らずの男に、つい手を差し伸べちやうようなそんなノリだ」

「でも……」

「おっと、これ以上何言ってもダメだぜ。俺、君、手伝う。OK？」

「おーけー？」

「よろしいですかの意。分かったらはいか良しかOKで答えてくれ」

勢いで押そうとしてるのかただテンパってるのか、早口でまくしたてる少年。若干ウザい気もするが大丈夫か？ヤバい奴って思われたりしない？

「分かった、分かりました。手伝ってもらいます。まったくもう、強情っ張りなんだから」

根負けしたのは少女の方。強情なのは二人ともだが、今回は少年の意地に軍配が上がったみたいだ。ウザがられて遠ざけられる、とかならなくて良かったね。

それはそれとしてこの子、押しに弱いというか純粹というか、どうにも心配になるな。コロっと言いくるめられて変な壺とか買わされそうなの危うさがある。

元からこの少年には付いてくつもりだったし、旅は道連れってことで。

「私も一緒に行かせてもらっていい？あなた達二人だけだとそこはかとなく不安で」

「お、助かるな。探し物するなら一人より二人、二人より三人。三人寄れば文殊の知恵って言うからな、これはもう見つかったも同然だぜ！」

「ごめん、ちよつと何言ってるか分からない」

俺も分からない。頼むから落ち着いてくれ、本当に。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

かくして、少女の無くし物及び盗っ人探しに乗り出した俺達だったが、搜索は早々に滞っていた。

——誰も、土地勘が無かったのである。

俺と少年は異世界召喚直後なので当然として、少女もこの辺りの地理には馴染みが無かったようだ。互いが互いにアテがあるものだと思つてしばらく歩いた結果、何の成果もなく立ち尽くしている現在である。

ただでさえ探し人するには広すぎるこの王都で、道も分からないよなこのメンバー。はつきり言つて絶望的です。物探す前に今日を生きる術を見つけたほうが良いと思います。

「結果的に振り出しどころか足踏みしちまつた訳だが、どうよ、お二人さん」

「あなたが分かるつて自信満々に言うからついていったのに……」

「調子乗つてすいませんでした、から聞こうかしら」

「そうだよね俺が悪いよねごめんね！」

いやまあ、大した考えもなくついていっただけの俺も悪いんだけど。ただ、いざ人に聞こうとしたときにコミュ障発揮したのは流石に反省してくれ。

「でも、ここで燻つてもしょうがないし、切り替えていこうぜ。そだ、自己紹介とかしとく？お互いをもっと知っておけば、さつきみたいな悲劇を回避できるかも」

ふむ、一理ある。そもそも一緒に居るのに呼び方が分からないのは不便だしね。

「では俺から失礼して。——俺の名前はナツキ・スバル！無知蒙昧にして天下不滅の無一文！ヨロシク！」

ポーズまで決めて堂々たる名乗りを上げる少年改めナツキ・スバル。内容とテンション合っていないよね絶対。

にしてもナツキ・スバルね……ちゃんと日本名っぽいな。この世界の他の人の名前は知らないけど、珍しい類の名前だろう。

「珍しい名前ね。その黒髪も見慣れない服もだけど、スバルってどこから来たの？」

補足助かる。やっぱり珍しい名前らしい。そうになると俺、この姿の名前考えなきゃいけないくなるな。見た目完全にこの世界の住人だし、二人にもそうであるかのように振舞って来たから、そこは演じ通さないといと。

「王道的な答えを言うなら東のちっさい島国かな」

「ルグニカは大陸図で見て一番東よ？」

「テンプレが通用しない……だと……？」

名前……どうしような……あんまり安直なものもアレだし……てかこの世界の一般的な名前ってどんな感じだ？

「じゃ俺はそんな感じで、次の方どうぞ」

「自分の居場所も分からなくてお金も無くて文字も読めなくて目つきも悪い不審者に教える名前なんて無いわ」

「急激な好感度ダウン!？」

違うんだよ、もうちよつと考えさせて。ここで安直に決めて後悔したくないんだよ。良いのが浮かんだらちゃんと教えるから。

「でもクソっ、事実だから強く言えねえ……切り替えて次！」

残るは銀髪の少女。純粋な異世界人の彼女だから、後学の為にちゃんと聞いとかなきゃ。

そう思っって視線を銀髪の少女に向けた。——見えた表情は、酷く痛ましげで。

「私は——サテラ。家名はない。サテラと、そう呼ぶといいわ」
数秒の沈黙の後、俺達から視線を外したままそう名乗った。

自分で名乗っておきながら、まるでそう呼ばれるのを拒んでいるよ
うな、そんな雰囲気を感じる。もしかして偽名か？何か名乗れない理由でもあったのだろうか、俺みたいに。

まあ深く突っ込むことじゃないかな。サテラね、参考にしよう。
……どっかで聞いたこと有るような無いような名前だな。

可能性とすればこの世界の有名人の名前を騙ったとか。後々調べ
てみようか。

四話

日もだいぶ傾き辺りが薄暗くなってきた頃、俺達は王都のはずれ、貧民街と呼ばれる場所を歩いていた。

先程までいた大通りとは打って変わって、すれ違う人影はまばらでその誰にも生気がない。家屋も寂れているものが多く、失礼だが名の通りの貧民街って感じだ。

そんな場所にジャージ姿の男が一人に金銀髪の美少女二人。場違い極まりない俺たちがなぜここに居るのか、それは銀髪の彼女——サテラの探し物がここにあるかも、という情報を嗅ぎ付けたからである。

ちなみに、急いでいるつてのに迷子の女の子を見捨てられない誰かさんのお人好しさが実を結んだ結果だ。俺はもう何も言わない。

「それに加えて、盗んだ子の名前は恐らくフェルト。居るとしたら盗品蔵って場所だって情報も掴んだ。そう、他ならぬ俺の功績で！」
「役に立てたのが嬉しいのは分かるけど、そうやって自慢げに言うのはさすが〜く格好悪い」

スバルは貧民街の住人と相性が良かったようで、有益な情報を聞き出すことに成功している。確かに、浮いているのは主に俺とサテラだけでスバルはこの場所においても違和感無い……は流石に失礼だわ。ごめん。

「残る問題は徽章を取り戻す方法ね。上手く交渉して買いもどせ、とは言われたけど」

「盗られたものを返してもらおうのに、どうしてお金が必要のかしら……」

「って言っちゃうぐらいに正直者じゃ、交渉でも逆に吹っ掛けられちゃうだろうな。俺は無知蒙昧の無一文だし……頼みの綱は君だけど、どうにかできそう？」

うーん。スバルに比べたらお金もこの世界の知識も多少はあるけど、それで上手くいくとは到底思えない。

「正直厳しいわね。そもそもこんな見た目じゃ相手にされないのが才

「ちよ」

「有効策は無し、か。ま、とりあえず盗品蔵つてどこに向かおう。穩便に話し合いで解決出来る可能性だつて無い訳じゃない」

それは希望的観測がすぎるだろう。とは思うが、ここで話してても他の方法が増えることもない。結局、進むしか道は無いな。

そうして十分ほど歩いた先。周りに比べて一回り大きい建物、盗品蔵であろう場所の前に俺達は着いた。

「さて、噂じゃこの中に蔵主が居て、盗品をまとめて捌いてるつて話だが……作戦は？」

「正直にお願いして返してもらおうわ。本当に困ってるのつて」

いやあ、普通に無理だろうな。こんな所に住んでて盗品を取り扱つてる様な人間が相手だ。盗まれる方が悪いだの言われて追い返されるか、足元見られて吹っかけられるか、何にしる碌な結果にはならないのが目に見えてる。

「よし分かった。ここは一旦、俺に任せてくんない？」

「正気？」

「想定的一段上の返しが来たな……残念ながら正気だよ」

あれ、無知蒙昧で無一文つて自分で言つてたの誰だっけ。そんな人が任せてほしいだなんて言つたつて、ねえ？

同意を求めてサテラに視線を向ける。彼女は一瞬の逡巡を見せたが、

「私は、スバルに任せてみる」

そう迷い無く答えた。

まじすか姉さん。あなた、この人にかなり足引つ張られてたと思うんだけども。

「自分で言つといてなんだが、ホントにいいの？」

「何か考えあつてのことなんでしょ。スバルはここでそんな嘘言う子じゃ無いって思うから」

「意外な評価を頂けて光栄だよ。その通り、詳しくは言えないけど切り札があるんだ。誓つて嘘じゃ無い」

「やっぱり。あなたも、スバルを信じてあげて。うまくいったら儲けものぐらいの気持ちで、ね？」

諭すような声でこちらに語りかけるサテラ。

やばい、この子のヒロイン力が高すぎる。そんな顔して言われて、断れる男は居ないよ。俺今女の子だけど。

「はあ、分かったわよ。スバルに任せる。一応これ渡しとくから、使えそうなら使って」

少しでも何かできることをしようと、俺はローブから硬貨の入った袋を出し、スバルに渡す。

「いいのか？」

「大した金額じゃ無いから、望みは薄いけど。一文無しで乗り込むよりはマシでしょ」

「このツンデレさんがよ。ありがたく受け取るぜ」

別にあなたの為じゃないんだから、勘違いしないでよね。マジで。

「じゃあ行ってくる。帰りは遅くなるかもしれないから、二人で先にご飯食べてて」

「行ってらっしゃい、気をつけてね」

「作り置きしておくから、帰ったら温めて食べるのよ」

そう軽く茶番を交わした後、スバルは恐る恐る盗品蔵へ入っていった。

……こんだけ表で騒いどいて、家主から何もアクションがない事が少々気になる。任せるって言った手前俺から動くことはしないが、警戒は怠らないようにしよう。

さりとて、手持ち無沙汰になった俺とサテラ。賑やかし役が居なくなっすっきり静かになっっちゃったな。そうだ、今のうちに一個聞きたかったことを。

「その、サテラってさ……やっぱり偽名？」

「……バレてたんだ」

最初に暗い顔で名乗られたときからな。名前を呼んでも反応が薄い時もあったし、気づかない方が難しくない？いや気づいてないっぽい人いたわ。さつきまでそこに。

「ごめんなさい」

「あ、いや、謝らなくていいのよ。誰にでも隠し事くらいあつて当然。私なんてそもそも名乗ってすらない訳だし」

「ううん、そうじゃなくて。あなた達を遠ざけようとしたこと。こんなに一生懸命に手伝ってくれてるのに、私は……」

名乗った時と同じ顔で、俯きがちにサテラは言う。

俺達をたちを遠ざけるために偽名を、ね。それも彼女にとってあんまい意味じゃない名前なんだろうな。じゃなきやあんな顔しない。他人に迷惑を掛けたくないがために自己犠牲を厭わない精神。それはもう、優しいの度を超えている。

「多分、そんなに気に病むことじゃないわ。最初に言ってた通り、スバルは自分の我儘であなたを手伝ってるだけだし、私もやりたいことやってるだけ。結果それであなたの足を引っ張って、むしろ迷惑かけてるのはスバルと私まであるわ」

「……ありがとう。でも、スバルが帰ったらちゃんと謝るわ」

謝る意味あるかなあ。遠ざけられたことどころか偽名にすら気づいてない様子だったけど。……まあ俺が口出すことじゃないな。せいぜい煽ってやるぐらいか。

お互いに無事に事が片付いた後の光景を考え、場の空気が柔らかくなった気がした——その時だった。

「——あっ！」

呻き声。次いで、何かが倒れたような音。盗品蔵の中からだ。

「今の……まさか、スバルに何か？」

「私、中を見てくるわ！あなたは周囲の警戒をお願い」

サテラの反応は速く、気づいた時には扉の前に居た。

本当に行かせていいものか、と疑念が頭をよぎるが、俺が行ってもきつと力不足。彼女に任せる他ない。

「慎重にね」

と、そう言葉をかけることしか出来なかった。

それから数分経った。が、中から二人が出て来ることも、ましてや

物音すらしなくなった。焦燥感が胸を搔き巻く。明らかな異常事態であるのは分かっているが、俺は動けずにいた。サテラに言われたせい、じゃない。力不足、なんて建前。実際はただ臆病なだけだ。

こういうところは死んでも演じてても変われないらしい。なんとまあ情けないことだろうか。

んなこと考えてる場合じゃない。乗り込むのか、又は人を呼んでくるのか。とにかく動けよ、俺。

——ふいに、盗品蔵の扉が軋んだ音を立てた。

「——あら、もう一人。あの子らのお友達？」

出て来たのは、知らない女。髪も外套も暗闇から産まれたかのような黒で染め、病的に白い肌だけが薄暗がりの世界に浮かんでいた。

「残念だけど、あの子達はもうここにはいないの」

——その手に握られたナイフから、赤黒い液体が垂れてるのが見えて。

「でも安心して。あなたもすぐに会わせてあげる」

いやにこびり付く血の匂いに、女の纏う異様な雰囲気、理解できないその言葉に、もう動くことなんて出来なくて。

「だから、貴方のお腹の中身も愛させてちょうだい？」

途端、焼けるような熱が、全身を襲った。

発生源は腹部。何か止めどなく溢れ出ている感覚。気づけば地に倒れ伏している。熱は収まらない。視界が霞む。涙が零れている。熱を超えて痛みがくる。意識が混濁する。熱くて、痛くて、熱くて痛くて、痛い。痛い、痛い痛い痛い死ぬ痛い死ぬ痛い死ぬ痛い死—

プツリ、とナニカが切れた感覚と同時、意識は闇に落ちた。

五話

「——どうしたよ、兄ちゃん。急に呆けた面して」

「は——？」

「リーナーガ、買うのか買わないのか、結局どーすんだ」

「え、いや俺、不倶戴天の一文無し……って言わなかった？」

「つんだよ冷やかしかよ。商売の邪魔だ、どっか行きな！」

「え？——どゆこと？」

往来の真ん中、誰に向けたわけでもない言葉を漏らす少年——ナツキ・スバルは困惑していた。

ほんの数瞬前までスバルは盗品蔵に居た。恩人の探し物を手伝ってたどり着いたそこへ单身意気揚々と乗り込んだは良いものの、そこで目にしたのは死体。その現実感の無い光景に目を取られた隙に、まだ潜んでいた殺人鬼にスバル自身も襲われ——死んだ、とそう思った。しかし、

「腹の傷、ねえな……」

ジャージを捲つて確認してみるも、バツサリと裂かれた腹部には傷跡がない。愛用のジャージにも縫い目はなく、なんなら土埃や泥すらも落ちているように見える。場所も相まってまるで異世界召喚直後のような状態だった。

傷が治っているのは治癒魔法によるものだろう。それが衣服等にも有用な可能性もまあ無くはない。ただ、時間が夜から昼になっていくことや盗品蔵から果物屋に移動していることなど、困惑の種は尽きない。

「盗品蔵に戻ってみるか？手掛かりがあるとすればそこしかないが……」

倒れた直後の光景が思い出される。異変を察知し駆けつけてくれた銀髪の少女——サテラもまた、凶刃の餌食となってしまうことを。その後の記憶は曖昧で、彼女がどうなったかは分からない。しか

しスバルがこうして健在な以上、彼女も無事であると考えるのが道理だ。もう一人、共に居た金髪の少女が獅子奮迅の活躍を見せたか、あるいはさらなる第三者の介入があったか。

なんにせよ、ここであれこれ考えてても状況は変わらない。盗品蔵へ向かおうと、振り返って走りだそうとして――

「わっ!？」

「うおっ――と悪い、大丈夫か!？」

軽い衝撃。すぐに近くに居た人にぶつかってしまったのだと気づき、反射的に謝罪を述べる。そして、その相手が誰だったのかに気づいたのはその直後だった。

「やば……コホン。あー、大丈夫よ。悪かったわね」

「いや、今のは急に振り返った俺が悪い……じゃなくてだな」

目の前の少女。スバルの胸ほどしかない背丈にはやや大きめのローブ。目を引く美麗な金髪から覗くのは、人形のように整った顔立ち。惹き込まれるような瞳の金色。その姿はまさしく、スバルがつい先程思い浮かべていたもので。

「君、無事だったんだな、良かったぜ」

「……はい?」

「ちようど君達を探しに行こうと……ってあれ、サテラは一緒じゃ無いのか?」

「……あの」

「俺の怪我、治してくれたの多分あの子だろ? 結局また借りを作っちゃったみたいだ」

見知った顔を見つけた安堵から、矢継ぎ早に言葉を放つスバル。それに対する少女の反応はどうにも鈍いが、その理由には心当たりがあった。

「あの、もしかして怒ってらっしゃったり……?」

「え、いやそういうわけじゃ……」

「いや、そりやそうだよな! 悪い。俺に任せてくれなんて言っというて、結局なんにも出来なかったわけだから……ま、その件に関しては追って謝罪するとして、ちよつと色々聞きたいことがあるんだけ

どいいか？」

サテラの安否、殺人鬼の行方、徽章の所在。スバルが倒れた後の事について、その場にいたであろうこの少女なら何か知っているはずだ。それに、たとえそれを抜きにしたとしても数少ないこの世界での顔見知り。禍根を残さず良好な関係を築くためにも、この機会を逃すべきではない。

「……その前にこっちから一ついい？」

「お、聞け。なんでも言ってくれ。罵倒でもなんでも、しかと受け止める覚悟は出来てる」

先程から煮え切らない反応ばかりだった少女が、ようやく口を開いてくれた。そこから出るのは果たしてどんな手厳しい言葉だろうか。それでも根は優しい子だ、自分の身を案じてくれるかも——なんて考えていたスバルには、

「——貴方は、誰？」

予想だにしなかったその言葉を、一瞬理解出来なかった。